

## 43

## 淡輪元潜と、その関連書物等について

池内早紀子

大阪府立大学大学院 人間システム科学研究科

淡輪元潜（たんのわ／たんなわけんせん）（三世）（1729-1808）は、関西にはじめて蘭学を唱えたと言われる小石元俊（こいしげんしゅん）（1743-1808）の師である。日本漢方が形成される上で重要な人物であるにも関わらず、これまでに大きく取り上げられることはなかった。漢方は、明治に西洋医学が導入された後もさらに独自の発展をし、今日に至るが、この漢方の基盤となったのは、小曾戸洋『漢方の歴史』が指摘するように江戸時代における「蘭方の影響も含めた日本医学の独自化」、漢蘭折衷の出現という新展開等を含む独自化があったからこそであろう。淡輪元潜は、永富独嘯庵（ながとみどくしょうあん）、小石元俊などに深く関わり、民間医療も視野にいれた治療書『雑方集験』を著すなどその後代に対する影響は少なくない。先行研究としては、羽倉敬尚「淡輪元潜及び養子元朔の全国医業行脚」が、淡輪親子が北海道にまで脚を伸ばしていたことを紹介するが、元潜の治療がどの様であったかなどという彼の医学の本質に関しては言及されていない。

淡輪元潜（三世）は、享保14年（1729）生。文化5年（1808）80歳で死去、墓は梅田院（大阪市天王寺区夕陽丘町）にある。本姓は小森、名は重弼（しげのり）、字は子諧（しかい）、号は葦山（ほうざん）。備後福山藩士の子であった。筑後柳川藩医で大坂在住の淡輪重泰（二世元潜）の養子となり、医を山脇東洋、儒を皆川淇園に学ぶ。山脇家の門人帳には、寛延4年（1751）10月6日に「大坂立花左近将監（しょうげん）殿家来 淡輪安省弼改元潜 栖涼軒取次 二十一歳」、「長門赤間関 長富鳳輔圍徳 磯部道求取次 二十歳」とあり、淡輪元潜と永富独嘯庵の二人は同日に一歳違いで入門している。元潜は、藩医として常安橋北詰（大阪市福島区）の藩邸に住み、禄は百石であった。「大坂御医師処便覧」でも西方の大関に載せられるほど医業は栄え、門人も多く集まったとされる。彼が、全国を巡り蒐集した医方をまとめたものが、『雑方集験』である。この遊歴について、羽倉は、「父子は医家として珍しい全国行脚をした。特に兩人とも北海道に渡った」と、それが広範囲に及んだことを述べている。北海道に渡ったことは、師である皆川淇園『淇園文集』の「淡輪弼ノ西遊ヲ送ルノ序」の一文によりも知ることができる。また香川修庵門人の沼（本姓、梅本）嘯翁（別号、古簾）（1721-1781）が「送子諧淡輪君序／草稿」（内藤くすり大同蔵）をしたためている。これは元潜の全国行脚への餞と考えられ、彼の調査活動は、京阪の古方派全体の期待を背負っていたことが窺われる。この当時としては非常に広範囲にわたる遊歴によって著された『雑方集験』は、弟子の小石元俊『経験方録』に大きく影響を与えたことは間違いない。

元潜の著は、『雑方集験』（杏雨書屋蔵）、『葦山堂随録』（内藤くすり大同蔵）、『葦山堂方函』（内藤くすり大同蔵）、『拔菁』（内藤くすり大同蔵）、『子諧集』（並河寒泉旧蔵、大阪大学附属図書館蔵）がある。また淡輪家に関するものは、蔵書目録『葦山堂蔵書記』（内藤くすり大同蔵）、解剖図巻（淡輪本）、1.『解體圖 淡輪家旧蔵平次郎解屍 全正』一卷、2.『解體圖 淡輪家旧蔵 副』一卷、3.『解體圖 旧淡輪家蔵 附録』一卷、4.『玉碎臟圖 淡輪家旧蔵』一卷（現杏雨書屋蔵）がある。そのほか九州歴史資料館分館柳川古文書館に「藩医 淡輪家史料」、懐徳堂に元潜旧蔵の書がある。

一方小石元俊は、淡輪元潜、永富独嘯庵の二人を師とし、彼の『経験方録』に「先生方」とあるのは、淡輪元潜、山脇東洋、小野蘭山、今枝栄濟の四人である（津田進三）また小石元俊『背部十対二十穴図』、『十対灸病症主治』など灸に治療法を求めていることなど、元潜の影響の大きさが窺われる。

本研究は武田科学振興財団の研究助成による。